

敬老会

3月19日(日)

午後12時半より

喜寿、米寿、白寿を迎えられる方々に、長年にわたってお寺のために貢献していただいた感謝の気持ちを込めて、表彰状を送らせていただきます。

該当されます方は、3月5日までにお寺までご連絡下さい。なお数え満年齢のどちらでも結構です



涅槃会

(お釈迦様が入滅された日)

2月19日(日)

午前11時より

(日英合同)

※法要後にランチがございます



毎月2回はお寺で HAVE A FUN !

10時半からのキッズサービスに引き続き

楽しいクラスやアクティビティを通して

アミダさまのお心を学びましょう

☆クラス予定表☆

1月8日(日曜日)

1月15日(日曜日)

2月5日(日曜日)

お子さんがいらっしゃるの方はぜひご参加下さい



八万の法蔵をしる

お釈迦様のご説法は「応病与薬」(病気に応じて薬を与える)といわれています。それは人びとの悩みや能力に応じて、さまざまに教えを説かれたからでした。その数の多さを古来「八万四千の法門」と言い伝えてきたのです。ですから「八万の法蔵をしる」とは、仏法の全体を学び尽くす程のことを意味していたのです。

お釈迦様がお説きになった説法で、中国に伝えられて、漢文に翻訳された大乘経典だけでも、「六百三十七部、二千八百八十三卷」(『註釈版聖典(七祖篇)』一二六七頁)あるといわれています。さらに、「経」を解釈した「論」や「釈」などを加えると膨大な数になります。これを学ぶということは、学力は言うに及ばず、大変な気力と根気を要することは容易に想像できます。

ところが、蓮如上人は「八万の法蔵をしるというも、後世をしらざる人を愚者とす。たとい一文不知の尼入道なりというとも、後世をしるを智者とす」と、記されています。

通常では、学問の豊かな人を智者とも、学者ともいいます。それに対して学問的要素のない人を愚者と考えます。たしかに社会一般の能力中心の価値観で評価すればそうかもしれません。しかし蓮如上人は仏道の中で知者と愚者の違いを述べようとされたのです。

愚者と智者

仏道を歩む者にとって、真の目的とは何なのか。それは「出離生死」という言葉であらわされているように、自らの人生を仏さまの言葉によって、人間としての正しい生き方と、逃れることのできない死の正しい意味を聞き分けて、かけがえのない一生を真に豊かに生き死にすることよりほかにはないのです。

そのために蓮如上人は、「知るべきものを知り、その道を歩む人」

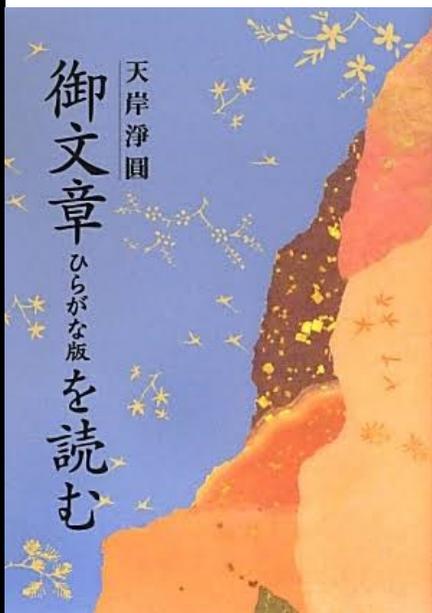
と「正しく知り、身をもって実践しなければならぬことを、知識だけにとどまって身についたと錯覚している人」を、智者と愚者とに分けられたのです。

学問の意味と無意味さ

仏さまの教えを学び、知らせていただくことは大切なことです。基礎的な学習と、それによる知識の習得がなければ、私たちは自分を超えた世界を知ることができません。しかし問題はそれからでしょう。仏法を学ぶ目的は豊富な知識を誇って自分が偉くなることではないはず。知識や、言葉にとどまるのではなく、その言葉の指し示す道を、自らの道として歩むことがなければ無意味と言わねばなりません。

いま「八万の法蔵をしるというとも…」と誠められた言葉は、言葉を知るに止まって、道といただかない者の誤解と、むなしさを教えられたのです。仏教を知ることと、その言葉のあらわす事柄を自らのことと受け入れて、努力して生きることには大きな違いがあります。意外にも誤解されている方が多いのではないのでしょうか。

天岸淨圓『御文章ひらがな版を読む』本願寺出版社より



『日頃の聞法』

別れは、出会いがあれば必ず訪れるものです。また、会うことは同時に別れのはじまりだともいえましよう。それを「生者必滅会者常離」ということばであらわします。いま、釈尊とお弟子の阿難あなんとの別れの場面が原始経典げんしきょうてんに語られています。耳を傾けてみたいと思います。

それは、釈尊が重い病におちいられた時、阿難あなんはや入滅にゅうめつされるのではとうろたえていたのですが、なんとか危機を脱することができ、平静さを取り戻されたのです。そこで阿難は考えました。釈尊はこのまま入滅されることはないだろう、最後にはきつと大事なことをおっしゃるにちがいない、と。阿難はその時を待っています。しかし、釈尊のことばは、次のようなものでした。

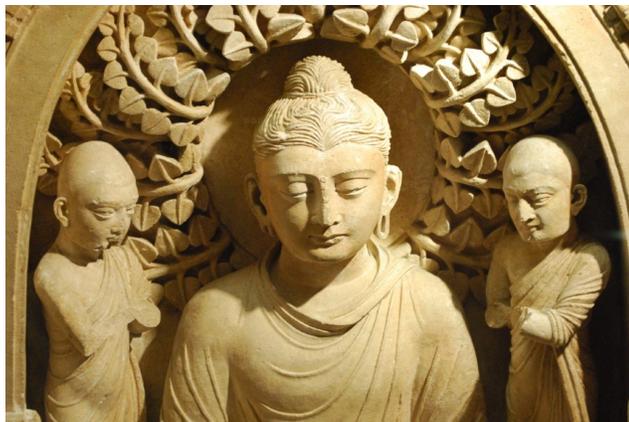
「アーナンダアーナンダ（阿難）よ、このうえ、出家者のサンガは私に何を期待しているのか、私はこれまで教えを、内外へだの隔へだてなく説いてきたではないか、アーナンダよ、如来には（師の拳けん）など存在しない……出家者のサンガは、私の指導のもとにあるという意識も存在しない」（マハーパリニツバーナ経）

このことばから、最後になって大切なことが聞けると思ったり、仏法に遇うことを人生の終わりに送ってしまうのではなく、日頃から聞くことが肝要だということやうかがうことができます。それは、師の拳がないということとは、釈尊が語らずに持っている教えは一つもないことを表しているからです。だから、釈尊が法を説いておられるときによく聞かねばならない、ということになるわけです。

また、釈尊には、人を導こうとか、教えを諭さとすという態度はなかったといえます。それはいまのことばにも示されています。釈尊は自らさとられた法に尊重恭敬そんじゆうくぎょうされています。これは、共に法に導かれていくということとを意味するものです。親鸞聖人もそうでした。説く立場ではなく、聞く立場で一貫しておられたということです。

大乗2016年1月号

勧学 大田利生



みこまれていました。彼らはその朝、仏陀と仏法を完全に受け入れることができたようでした。なんと美しく、無邪気で純粹だったことでしょうか。惨めな凡夫として、私は極楽浄土に行くことを最早望んでいませんが、その朝、私は輝く光にかつてないほど近付くことが出来ました。感謝の言葉しかありません。

ささやかな出来事ではありますが、この総代としての4年間を締めくくりに相応しい最高の終わり方でした。その2人のご門徒は善良で希望に満ちた寺院、門徒、そして支援者の方々の全てを代表していると思います。彼らが身を捧げる気持ちの強さを感じ、私はお寺や開教使の先生方、ご門徒に明るい未来が待っていることを確信しています。私はすべてのこの読者が新年を健康と幸福とを共に迎え、それが幾年にも続いていくことを心から願っています。それと同時に私は皆さんにお願いがあります。トロント本願寺と先生方が地域社会の中で仏法の精神を育み拡げていくことを、どうか支えていってください。それではまた近いうちにお会いしましょう。

トロント仏教会 総代 草野ロイ

日本語法座のご案内 (毎週月曜10時より)

『浄土真宗って？仏教って？そもそも宗教ってなんだろう？』

そういった疑問を駆け出しの坊主と一緒に考えながら
噛み砕いた言葉でお話しをさせてもらっています。

親鸞聖人がお書きになった正信偈と一緒に称え、
浄土真宗のみ教えに耳を傾けてみませんか？

毎週月曜日10時より勤行の後、日本語の法話をしています。



1月の日程表：

9日 往生禮讃偈(初夜)

ほうりんほうじゅみめうおん

16日 正信偈(行譜) 和讃「宝林宝樹微妙音～」

しっぽう ほうち

23日 正信偈(草譜) 和讃「七宝の宝池いさぎよく～」

そんじゃあなんざ

30日 正信偈(草譜) 和讃「尊者阿難座よりたち～」

問い合わせは、大内祐真(僧侶)まで rev.ouchi@tbc.on.ca

総代から新年の挨拶



いよいよこの時が来てしまいました。この寄稿が私の最後の挨拶となるようです。ですから文字数を数えるのも最後で、紙面を埋めるための試行錯誤も必要ありません。この私の連載ももう終わりです。この気持ちはなかなか言葉になりません。

2016年は印象深い年でした。私たちは今年ある開教使を失い、また新たな僧侶を迎え入れることが出来ました。去年はかけがえのないメンバーや友人たちに別れを告げました。年を取ってより虚弱になった者もいれば、病気で倒れた者もいました。しかし、私たちのお寺の日程表はこれまで以上に慈善活動等でも賑やかになり、ベテラン、初心者もこれまで以上により働きをしてくれました。

年の瀬の十二月十八日のお寺での出来事です。その日の法要は、お釈迦様が悟りをひらかれた日である成道会の法要でした。お坊さんもそのことに関するお話しをしてくれました。お釈迦様の悟りのことは皆様もよく耳にしているかと思われませんが、たった数分の法話で語り尽くせるはずありません。ただ、いつも通りお寺に赴いた私にとってその日は2016年の最高の日曜日の一つとなりました。

大内先生もたまらず特別な日であったと言っていました。なぜそれは特別な日だったのでしょうか？それは冗談交じりで「クリスティーナ先生と私の両方がここにいるからです！」と言った後に真面目な顔をして「そして、みなさんがいまここにいるからです。」と彼は答えました。それは確かに非常に特別な日です。しかし私にとってはそれ以上のものがありました。さとりの日ではありませんでしたが、本堂はガラガラでした。おそらく20数人の聴衆でしょう。じつは私はそのような状況が好きです。自己中心的な考えですが、本堂が私の私的な聖域であるかのように感じることで、先生は聴衆ではなく私に話しているように感じるからです。

そして、その成道会はいつともよりはるかに特別でした。本堂にほんの少ししか人がいなかったのでも、初めて私は長い間ご門徒である89歳と88歳の兄弟の隣にいらんで座りました。私は彼らの唱えるお経と讃佛歌そしてお念仏に耳を澄ませていました。彼らのお念仏を聞くためにすべての感覚を澄ませ、私は法要の間言葉を発することが出来ませんでした。私は彼ら兄弟の存在に完全に包

私たちの言葉というものは、ときに人を喜ばせもしますが、反対に人を知らないところで傷つけていたりもします。大谷光真様は「挨拶を交わすことは、あなたのこころを取り囲んでいる壁を開かせる役割がある」とおっしゃっています。もし挨拶というものにそのような力があるならば、その力は誰かのこころを支え優しくさせることができるのでないかと思えます。

私はあなた方すべての人が幸せな新年を迎えられたことを願っています。そして、2017年もまた皆様とともに念仏を申せる年になりますように楽しみにさせていただきます、皆様が互いに親切な言葉を交わしあえるように期待しています。

最後に、私はここから皆様に去年からの献身的な支援とご協力に感謝の言葉を述べたいと思います。2016年の始めは私にとって大変困難な時期でしたが、2016年の終わりには私が想像していた以上に良いものとなりました。これも全てあなたからの親切心と思いやり、支援があったからです。また来年度もお変わりないご協力のほどよろしくお願ひ申し上げます。

クリスティーナ・ヤンコ 開教使

報恩講

宗祖親鸞聖人のご命日にあたり、聖人のご苦勞を偲び
ご恩徳に報謝する、浄土真宗でもっとも大切な法要です



1月14日(土)

午後5時 ベジタリアンポットラック夕食

午後7時 報恩講(逮夜法要)

※法要後おぜんざいが振る舞われます

1月15日(日)

午前11時 報恩講(日中法要)

午後12時半 新年会

※ランチと楽しいエンターテイメントを用意しています

新年明けましておめでとういいます。



皆様、明けましておめでとういいます。新しい年にむけての楽しい年末を皆様が過ごされたことを心より念じております。

さて、2017年を迎えるにあたりまして、それぞれの年でさまざま出来事があるように、毎年同じ年というものはないと思います。その年々でそれぞれの出来事があることでしょう。その出来事とは、ときに喜ばしいことであつたり、ときに残念に感じるたことでもあつたかと思ひます。しかし、それらは常に私たちに学びと反省の機会を与えてくれます。つまり、その機会の一瞬一瞬が私たちに前進するためのものを運んでくれているのです。少し思い返してみてください。去年の2016年は大変な年だったか、もしくは楽しい年だったのか。その去年を思い返すことは、2017年に向けての新たな価値を見いだしてくれます。

最近、私（開教使）の言葉というものは、他人へ大変つよく印象に残りやすいものであると友人から話されたことがあります。それはときに正しいと思われることを言葉にしたときでさえも、人を怒らせてしまうことがあるからです。少し思い出してみると、他人から言われた

言葉で良くも悪くもころをうたれたものが、あなたの人生にはあるのではないのでしょうか。言葉というものには、とても強い力があります。

いったい何回あなたは人と話す前にその言葉を慎重に選んでいたでしょうか。たびたび私たちは何も考えずに、またその言葉がどれだけ他人に影響を及ぼすのかを考えずに口にするがあります。もしくは故意的に相手が傷つくことを言っている人もいるかもしれません。いままでにメールでのメッセージを受け取ったことがありますか。最初のうちはそのメールでのやり取りに否定的な印象をもっていた方がいるのではと思ひます。なぜならメールでの言葉は抑揚や強調したところが欠落してしまいがちだからです。

ある日、私の夫が我が家を掃除していたことがあります。それは私にとつて大変うれしいことでした。しかしながら、そのとき私は急がなければならぬ仕事で追われておりました。私は急いで外へ出る際に夫にたいして「ありがとう。とても嬉しいわ。」と言ひました。しかし、そのときは仕事のことばかりを考えており、感謝の気持ちを込めた言葉で話しかけたわけはありませんでした。

結果的に夫は私があまり家族や家のことを考えてはないのではないかと感じてしまいました。そして、なぜ感謝もなしに強制的にそれらをしなればならないのかとも感じていたでしょう。

この移り変わる世界でたのみとならない

ものをたのみとし、貪りと怒りに明け暮

れ、わが身の愚かさに気づかないでい

る。そんな自分のすがたに阿弥陀如来の

本願であるお念仏を通して気づかされて

くるとき、阿弥陀如来の智慧を依りどこ

ろとした信心の人生が開かれます。この

如来の智慧が恵まれるとき、そこに自ず

から「無明の闇が破」られることになり

ます。

でんとうほうこくほうよう

『伝灯奉告法要』もまた、ただ単に世

代を交代のお知らせをするイベントでは

ありません。その如来の無明を破する光

明と宗祖・親鸞聖人があきらかにされた

浄土真宗のみ教えが広く伝わることを願

い旨とし勤められる大事な法要です。

ここカナダに浄土真宗のみ教えが届い

ているのも、今まで伝灯されてきた歴史

があったからです。私一人では気づきも

出来なかつたみ教えに出遇えた慶びと共

に、日本へ行き法要参拝できない方も、

カナダで共に仏さまの光明に掌を合わ

せ、お念仏申す日々を過ごさせていただ

きましよう。合掌

駐在僧侶 大内祐真

第25代専如門主 伝灯奉告法要

修行期日 (全10期80日80座)

修行場 (西本願寺)

©2017 (平成29) 年

第5期 3月7日 (火)～3月14日 (火) まで

第6期 3月28日 (火)～4月4日 (火) まで

第7期 4月11日 (火)～4月18日 (火) まで

第8期 4月25日 (火)～5月2日 (火) まで

第9期 5月9日 (火)～5月16日 (火) まで

第10期 5月24日 (水)～5月31日 (水) まで

法要は1日1座 (午後) とし、本山において修行

ただし、2017年4月18日のみ、大谷本廟において修行



2016/10/1 [SAT] - 2017/5/31 [WED]



伝灯奉告法要とは、

宗祖・親鸞聖人があきらかにされた「浄土真宗のみ教え」(法灯※1)が、聖人から数えて第25代となる専如ご門主に伝えられたことを、仏祖の御前に告げられるとともに、お念仏のみ教えが広く伝わることを願い、伝灯※2奉告法要が平成28年秋から29年春にかけて1日1座、80日間勤められます。

※1法灯：「念仏の法」と示される、親鸞聖人がひらかれた本願名号の真実の教え、浄土真宗のみ教えのこと。

※2伝灯：宗祖・親鸞聖人が明らかにされた真実の教え「浄土真宗のみ教え」(法灯)を伝承し、受け継ぐこと。

新年の挨拶



新年明けましておめでとうござ
います。

旧年中は多くの方々より数々の
お育てをいただきました。誠に有
り難うございました。また今年の
四月には、ここトロント仏教会で年に一度の会議（浄土真
宗カナダ教団年次総会“JSBTCAGM”）が開かれます。今
後とも皆様のご理解とご協力を賜りますよう、何卒よろし
く願ひ申し上げます。

さて、京都の西本願寺では、去年十月から今年五月いっ
ぱいにかけて御門主の代替りの法要『伝灯奉告法要』が
勤められています。この『伝灯奉告法要』とは、宗祖・
親鸞聖人があきらかにされた「浄土真宗のみ教え」が聖
人から数えて第25代目となる専如せんじよご門主に伝えられたこ
とを、仏祖の御前に告げられるとともに、お念仏のみ教え
が広く伝わること願ひ勤められる法要のことです。

ここで注目したいのが、「伝統」ではなく「伝灯」、
「報告」ではなく「奉告」であることです。

最初の「伝灯」とは、宗祖・親鸞聖人が明らかにされた真
実の教えを伝承し、受け継ぐことをあらわします。そして
「奉告」とは、仏祖に対して法要の旨を告げさせていただ
くことです。つまり、ただ単に世代交代を私たちにお知ら

せするものではなく、浄土真宗のみ教えが伝承さ
れ、受け継がれた旨を仏祖に告げさせてもらうのが
「伝灯奉告法要」なのです。

その「伝灯」には見ての通り（灯）という字が使
われています。皆さんには、よく（灯火）や（灯
明）の（灯）として目にすることが多いのではと思
われます。この“灯”が放つ光は、ものをありのま
まに見ることのできない私たちを照らす仏さまの慈
悲と智慧のおはたらきを象徴しています。

無明むみょうの闇あんを破やぶするゆへえ 智慧ちえ光こう仏ぶつとななづけたり

一切いっさい諸しよ仏ぶつ三さん乘じやう衆しゆ ともともに嘆たん誉じよしたまへり

（讚阿弥陀偈和讃）

無明とは、ありのままに物事を見ることができ
ず、仏の智慧さえも疑ってしまう私たちのすがたで
す。しかし、それすらも何の隔たりとせず照ら
し、はたらき続けている仏が智慧光仏とも名づけられ
た阿弥陀如来だったのです。

歎異抄の後序には、「わたくしどもはあらゆる煩惱
をそなえた凡夫であり、この世は燃えさかる家のよ
うにたちまちに移り変わる世界であって、すべては
むなしくいつわりで、真実といえるものは何一つな
い。その中であって、ただ“阿弥陀如来の本願の”
念仏だけが真実なのである。」（『歎異抄 現代語版』
本願寺出版社）と書かれてあります。さとりには一番
遠い無明という煩惱を備えている私たち。

佛心

二〇一七年一月号

浄土真宗

トロント本願寺

年頭の辞

新しい年のはじめにあたり、ご挨拶申し上げます。

本願寺では、昨年10月1日より本年5月31日まで10期80日にわたって伝灯奉告法要をお勤めしています。海外からの皆さまも含め、たいへん多くの方々にご参拝・ご協力いただき、法要をお勤めできていますことは、まことに有難く、感謝申し上げます。

皆さまとともに伝灯奉告法要をお勤めして、浄土真宗のみ教えが800年近くの時を経て私たちに伝えられ、また、日本だけでなく世界各地に伝わっていることを改めて実感しています。それぞれの時代のなかであって、浄土真宗のみ教えが一

人一人の方の生きていく依りどころ、支えであったから、今日まで絶えることなく受け継がれてきたと思います。

親鸞聖人は、さまざまな出来事に悩み苦しむ私たちのために、浄土真宗のみ教えをお示しく下さいました。本年も浄土真宗のみ教えを聞き、ご家族の方などご縁のある方々にお伝えいただき、南無阿彌陀仏とお念仏申す日々をともに過ごさせていただきましょう。

2017年1月1日

浄土真宗本願寺派 門主 大谷光淳

